



畑中 武さん・ヤイさん(中浜)

取材者：浪江町役場 舩田・中川
取材日：10月2日

今も浪江の夢を見る。でも前を向いて生きよう。

浪江に生まれ育って80年。畑中さんは人生で二度、家をなくされました。一度目は先の大戦での空襲。そして東日本大震災。息子さん夫婦と3人のお孫さんに囲まれ、幸せな暮らしを送っていた中浜の自宅は、津波にさらわれました。一度はバラバラになったご一家ですが、現在はいわき市に新築されたご自宅で、再び皆さん一緒に平穏な暮らしを取り戻しておられます。



▲仲睦まじい畑中さんご夫婦です

■大切なのは命と人の情け
震災当日、家族7人はみな違う場所にいましたが、奇跡的に全員が無事でした。私と妻は、地震のあと一度自宅に戻り、テレビで津波警報を知ったのです。到達まであと10分。「逃げろ！」と叫びました。別の場所にいた息子は、バックミラーで津波が追いかけてくるのを見ながら必死で逃げ、間一髪で山の斜面をよじ登って助かりました。
そんな経験を経て思うことは、まず一番大事なのは命。そして次に大切なのは、人情です。その後の生活では、本当に人の情けに助けられました。

震災の翌日、私たちは会津に向かいました。息子の大学時代の同級生が会津にいて、呼び寄せてくれたのです。避難所で朝一杯の粥だけ飲み、70キロの道のりを自分で運転していったのですが、到着後は疲労困憊で倒れてしまいました。救急車で搬送されましたが、幸い事なきを得ました。
会津では、そのご一家に大変よくしていただき、3週間ほどお世話になりました。3月末に東京に住む娘が迎えに来てくれて、そこから2年ほど、東京都江戸川区の住民となりました。地元の人に入ると、旅行にいたり、いろいろな活動に参加しました。そこで知り合った方に手作りの仏像をいただき、その話が新聞に大きく載ったこともあります。ほかに、私は自作の紙芝居で子供たちに昔話をきかせたり、もちろん大震災の話もしました。昨年2月に東京を去るときは、送別会まで開いてくださり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

■戻らない、でもつながりたい
今のいわきでの暮らしは幸せです。浪江には帰る家がないし、あの一带はもう人が住めない場所になってしまった。戻るつもりはありませんが、でも骨を埋めるのは、やはり故郷の浪江なんです。だから大平山に新しくできる共同墓地に、墓を作ることになりました。墓碑銘は「ありがとう」。お参りにきてくれてありがとう、生んでくれてありがとう、その二つの気持ちが合わさる場所になるように。そして裏面には、子孫のための記録として東日本大震災で中浜の家屋が流出したことを記し、「このようになことが二度とないように。合掌」と刻印しました。
私は若いころから山登りが趣味で、76才のとき富士山登頂も果たしています。だから足腰は丈夫なはずですが、東京に引越したころ、どうにも足が震えて歩けなくなることがあります。でも「こんなところで死んでたまるか」と気持ちを奮い立たせ、50歩から始めて最後は7、000歩まで歩けるようになりました。
医者に言われたのは、「気持ちをおだやかに持ちなさい」ということ。今でも浪江の夢を見ますし、東電への怒りはもちろんあります。でも起きてしまったことはどうにもならない。「前を向いて生きる」。これに尽きます。私の人生に悔いはありません。

浪江のころ通信

・第41号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のころ通信／第41号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





八幡万里子さん(室原)

取材者：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地
取材日：10月1日

夢は福島に戻って「琉球かすり」を 広めること

2011年3月末にご夫婦で沖縄に避難された万里子さん。避難してすぐに出会った沖縄の織物である「琉球かすり」織りを、現在も続けていらしゃいます。「沖縄には娘夫婦もいて、かすり織りができて生活に不満はないけれど、ふるさと浪江への思いは消えません。気持ちは悶々としています」と話します。



▲ご自身で織った「裂織」作品と一緒に



▲万里子さんが今後チャレンジしたい「南風原花織」

■今も続けている「琉球かすり」織り

沖縄に来て習い始めた「琉球かすり」織りは、今も通って織っています。通常、織りの研修は工房に入りますが、いつ福島に帰るか分からない私の立場を理解していただいている琉球紺事業協会の組合の理事長に「帰りたいからいつでも言ってくれたらいいからね」と言ってもらい、組合に席をおいて織りをさせてもらっています。

■ふるさとを思う気持ちは消えない

今は、福島県に帰りたい気持ち強いですが、友達が恋しい。でも福島県のどこに帰るのか？福島県内で住む場所を探したとしても、ご近所は知らない人ばかりだろうし、そんな不安があります。また、沖縄には娘夫婦、孫もいます。福島に帰ると会えなくなるので、それはさみしい。帰りたいという気持ちがあってもどうしたらいいのかな…。

■今は夢の途中

沖縄の生活は幸せで、特に不平不満があるわけではないけれど、望郷の念だけはどうにもありません。悶々とした気持ちはありますが、「琉球かすり」織りをやっているときは、この悩みから解放されます。いつかは、福島に戻って「琉球かすり」織りを続けたいという夢があります。誰に頼まれたわけではないけれど、「琉球かすり」織りをやっているのは私の使命かと思っています。福島県内に家を建てて機織りしながら、「琉球かすり」を広めていき、また沖縄にあるたくさんの方に夢を伝えたいです。今は夢の途中。夢を叶えられるようにがんばりたいです。



鈴木 悦夫さん・良美さん(田尻)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：10月9日

四季の移ろいを楽しみながら、 元気で長生き！



▲「ここまでできたら長生きしないとね」という良美さんのとなりで、にっこり微笑む悦夫さん。

実家のある平泉で暮しはじめて3年7か月。「今年ぐらいからやっと落ち着いてきた感じがする」と時間の経過とともに変化してきたお気持ちをふりかえり、ご家族やご近所の方とのお付き合いを大切にしながら、またその存在のありがたさを実感する日々。目の前には金鶏山、その麓に広がる四季折々の表情に癒されて、お二人とも楽しみながら暮らしておられます。

■懐かしい浪江

良美さん 平泉へ来たのは、震災があつて3日か4日後でした。地震の後に家の片付けをしていると、原発のことで無線連絡があり、どこでもいいから逃げてくれたらいいから腰が悪かったので、床に座れる状態ではありませんでした。避難所に行っても迷惑かけられることになるので、実家に連絡をとりました。こちらに来ることにしました。顔を見られて安心したようでした。今では文句を言い合いますが、近くにいるありがたさを実感しています。今住んでいるところは眺めがよく、毎日自然の移り変わりを

■いまはいい、のんびりと

悦夫さん そもそも浪江で暮らすようになったのは仕事がかつかけでした。盛岡の警備会社に勤めて、その現場が福島原発でした。最初は大熊で暮らして

■懐かしい浪江



▲庭先から一望できる金鶏山

こちらに来た頃は言葉もたどたどしく、よそ行きの言葉を使っていました。今ではだいぶこちらの生活に慣れました。「みなさん平泉にいらっしゃいますか！」って、観光客を迎える側の気持ちで、もう地元気分です。町からの通信を見たり、テレビに出ていた町長さんを見たりすると、懐かしいと思います。ね。「浪江」って聞くと耳がピツと反応しますね。

その後車で平泉に避難して、今に至ります。ここから車で5、6分位のところに実家があるので、今ではよく行き来してみんなで食べたり飲んだりしています。ここは温泉があつていいですね。

楽しんでいきます。朝は北上川から雲がかかって山が浮かんでいるように見え、夜空も綺麗です。そう、ちょうど皆既月食も見ましたよ。主人がカメラで撮っていました。夏は前沢の花火、お盆には金鶏山の大火、これからの季節は紅葉も楽しめますね。冬は金鶏山や手前の田んぼの雪景色もとっても綺麗で、景色がほんとに変わります。風も入って気持ちがいいのですが、夏、蝉の音がうるさすぎるのが難点かしらね(笑)。

こちらに来た頃は言葉もたどたどしく、よそ行きの言葉を使っていました。今ではだいぶこちらの生活に慣れました。「みなさん平泉にいらっしゃいますか！」って、観光客を迎える側の気持ちで、もう地元気分です。町からの通信を見たり、テレビに出ていた町長さんを見たりすると、懐かしいと思います。ね。「浪江」って聞くと耳がピツと反応しますね。

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」

富沢 和正さん(権現堂)・木幡 健一さん(赤宇木)
平田 邦之さん(権現堂)・熊谷 徹さん(高瀬)



山形県

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：10月5日

ありがとう高島 4年目の感謝を込めて
～つながった絆をこれからも大切にします～

「ナイスピッチング！」浪江大吉SSBチームの活気のある掛け声が、今年も山形県高島町のグラウンドに響きました。チームの代表・松崎光平さんらが山形県高島町に避難し、やきとり大吉高島店店長の伊藤さんと出会ったことがきっかけで、高島町総合体育大会ソフトボール種目に出場するようになってから4年目です。「震災当時後押ししてくれた高島町の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです」と、松崎さんとキャプテンの小松山さんは話してくださいました。今回は出場したメンバーの皆さんにお話を伺ってきました。



▲今年は惜しくも準優勝



▲声を掛けマウンドへ

と思っと思っています。とりあえずは毎日を精一杯に過ごすというところが今できることですね。あとは、毎年この大会に出させてもらい参加するだけでなく、何

か高島の皆さんに恩返ししなきゃなと思っっています。まだそこまでは考えられてない状況ですね。きっかけがあれば戻りたいなという気持ちはありますけれども、この時期は津島の紅葉はともきれいだっただけを思い出します。また見たいですね。

メンバーは家族のように、もう近くにいたのが当たり前のような存在です。こうして毎年集まれるというのは嬉しいし、こうした機会を大切にしながら、これからも参加していきたいなと思っっています。

木幡 就職と同時に南相馬市に出生した。実家は津島なので、今も線量が高くて入れない場所です。悔しい気持ちはあります。熊谷君とは高校の同級生で、近くの熊谷君の家によく遊びに行っていました。いつかまた皆で浪江町で飲みたいですね。皆さんいろいろ苦労して今過ごしていると思っますが、前向きに頑張りましょうとしか言えないです。ぜひまた皆さんと浪江町で試合をしたいです！



▲お話を伺った皆さん
左から、平田邦之さん、富沢和正さん、木幡健一さん、熊谷徹さん

◆チームへの想い、この大会への想い

富沢 この大会に出場するのは3回目です。今叔母が高島に暮らしており、一時的に祖母もこちらに避難していました。代表をやっている光平や祖母と、震災後再会したのもここ高島でした。こうして身近な人間がお世話になった所で、こういう機会を与えてもらっていることは大変ありがたい話で、なにか縁があるんだと思っます。この話をするると震災当時を思い出っすね。年に数回ですが、集まれ

◆この大会への想い、この大会への想い

木幡 夜勤明けだったので、この大会を楽しみに来ましたが、今は、南相馬市に住んでいますが、まだお店も再開してないです。楽しみがなく息抜きできる場もないので、こうやって皆でソフトボールができることは、リフレッシュできるので非常に楽しみにしてました。私にとってチームのメンバーは皆兄のような存在です。家族のような感じですね。メンバー皆にお世話になり感謝してっます。

るのは楽しいです。平田 私は毎年申し訳ないなというか、ありがたいなという気持ちで出させてっただいてっます。皆ばらばらになっただった中で、まさかまた町村大会が再開できると思っっていたので再開した時は嬉しかったですね。個人個人で会ったりはしてっます。が、メンバーに会えるのは町村大会とこの高島大会くらい。皆と会えることは本当に嬉しいですね。

◆これからの暮らしや進み方について

富沢 今は仙台市で仕事をしており、ひとまず定年までは仙台でと考えてっます。私は、定年になったら浪江に帰りたいなと思っっています。その頃には町も落ち着くのではないかなと思っているんですけど、まあそれが一つの夢ですね。そしたらまた浪江でまた皆とソフトボールしたいです。

平田 今は相馬市に暮らしてっます。震災後は、群馬県館林市にいて、昨年相馬市に引っ越しました。先のことはまだわからないので、まだ決められない

き、誠に有難うございます。今年も、皆さんの元気な姿を拜見し、ほっとしているところです。十分な練習時間もとれないなか、松崎代表を中心としたチームとしてのポテンシャルの高さと、久しぶりに会った友人のように気さくに接してっくださる皆さんの人間としての魅力を毎回毎回、優しく感じております。ユニホームを新調されドレスアップされた『新生・浪江大吉SSBチーム』を、来年も心よりお待ち申し上げます。

●山形県議会議員（総合体育大会副実行委員長）
島津良平さん

全国に散らばった方々が集まり、高島で試合していただけるということは私たちも大変嬉しいことです。町長杯も復活したということで、高島の大会が活気を取り戻すきっかけになったのなと思っっています。今年は交流のために芋煮会も行っます。これからも町としてできることをしていきたく思っます。また来年も元氣にお会いしたいです。

●浪江町復興支援員山形駐在
佐藤眞敏さん、小松原慶子さん、渡邊健太さん

ソフトボール競技は浪江町を挙げて盛んなスポーツで、歴史があります。チームの皆さん鍛えられており、これまで練習してきた成果がわかりました。個々のプレーがどのチームよりも勝っているし、活気がある素晴らしいチームでした！

お世話になっっている方からコメントをいただきました！



左から、高島町ソフトボール協会会長 高橋さん、山形県議会議員 島津さん、副会長 菅野さん
浪江町復興支援員山形駐在小松原さん、佐藤さん、渡邊さん
やきとり大吉高島店 店長 伊藤さん

●高島町ソフトボール協会
会長 高橋英助さん、副会長 菅野康雄さん

高島町の協会としては、参加していただくのが当たり前のようになっっており、「今年も来ていただきありがとうございます」という気持ちです。浪江チームは、動きも速いし元氣もいい！この日だけでも一日楽しんでいただきたいと思っっています。これからも交流していきたく思っます。また来年も会いましょう。待っっています。

●やきとり大吉高島店 店長 伊藤健彦さん
Welcome.まほろばの里・高島町へ、ようこそ。
4年連続、高島町ソフトボール大会にご参加頂